研究課題	ロイロノートを利用した主体的な学びの実践
副題	～英語を使用した日本文化の発信とカンボジアの文化理解～
キーワード	英語　ロイロノート　国際交流　オンライン　英会話
学校/団体 名	私立プノンペン日本人学校
所在地	〒120802 No. 205B, Street Lum, Group 5, Village Toek Thla, Sangkat Toek Thla, Khan Sen Sok, Phnom Penh, Cambodia
ホームページ	https://jspp.tv/

1. 研究の背景

プノンペン日本人学校では児童・生徒数の減少が課題であり、その原因を紐解くと、インターナショナルスクールとの関係が大きい。プノンペンには 61 校のインター校があり、それぞれが特徴を出した英語教育を行い、激しい競争を展開している。日本から赴任してきた保護者は、海外に来たのだから、まずは英語力の向上を第一に考えインターナショナルスクールを選ぶ傾向が強い。しかし、日本の学習指導要領に則ったカリキュラムでの教育を求めるニーズも保護者の中にあり、魅力のある英語教育と学校経営ができれば、学校を取り巻く状況が大きく変わり、入学者数が増加することが予想された。そこで 2023 年度は英語力向上を学校経営の柱として、研究を進めてきた。

2. 研究の目的

本校では英語力向上の手段としてロイロノートを導入することを全職員の合意のもとで決定し、ロイロノートを使った施策により、児童の英語力がどのように向上していくのかを研究テーマとすることにした。以下は本校が行った 4 つの施策である。

①王立プノンペン大学の学生による、1 対 3 の英会話授業

本年度より小学部 1 年生から中学部 3 年生までの全校で英会話授業を創設した。王立プノンペン大学の英文学科の学生に来てもらい、年間 23 回の英会話授業を行った。教材については英語担当で作成しロイロノートで配布した。

②「ロイロノートを使用し、4 技能を高める宿題を課す」

小学部では、1 年生から 6 年生まで週に 1 回または 2 回の通常授業を実施しているが、真に英語を定着させていくためには、ロイロノートを使い自作の宿題を出し、英語に触れる機会を増加させることが大切であると考えた。

③「英語を使うアウトプット機会の増加」

三つ目として取り組んだことは、英語を使う機会の増加である。このアウトプットの機会を多く持つことによって、児童の英語力は増加し、英語に対するモチベーションが高まると予想した。そこで年度当初に小学部で話し合い、総合的な学習の時間と英語のアウトプット機会を融合させることを決定した。具体的には総合的な学習の時間において、日本のポップカルチャーとは何かを学び、そこで学んだ日本のポップカルチャーの魅力を現地校やインター校にアピールすることにした。ポップカルチャーの内容はカンボジアでも人気のある日本アニメとし、この活動に

より日本アニメの人気をカンボジアで確たるものにしようと目標設定を行った。その活動の際に、1 年生から 6 年生まで操作が簡単なロイロノートを使用し、児童が主体的に活動できるように授業設定を行った。また 5 年生をトライアル学年と設定し、枚方市立小学校、グアム日本人学校との定期的なオンライン交流を実施することにより、他学年との差異も研究することとした。

④通常教科においてもロイロノートを活用し、児童主体の授業に転換する

ロイロノートを英語で最大限活用するためにも、日常の授業へのロイロノートの普及が不可欠であると考えた。そこで、全職員がロイロノートを活用し、児童主体の授業が展開できるよう、ロイロノートの使用方法の研究を行い、英語力向上に活かしていく事を決定した。

本研究ではこれら 4 つの施策を中心として、児童の英語力にどのような変化があったのかを明らかにし、さらにプノンペン日本人学校の英語力を向上させるためには、何が必要なのかを提言していくことを目的とした。

3. 研究の経過

月	実施内容	備考
4 月	・第 1 回、2 回教職員ロイロノート研修 ・第 1 回英語スピーキング、リスニングテスト ・総合的な学習の時間での日本ポップカルチャー学習スタート ・英語授業におけるロイロノート宿題スタート ・教職員ロイロノート通信発行（毎月 2 回発行）	・スタート時英語力データの集積 ・年間 50 時間の学習（3~6 年生） ・授業時に毎回実施 ・教職員のロイロノートを使った実践について取材・発行。ロイロノートに関する役立つ情報を掲載。
5 月	・プノンペン王立大学英文学科学生との年間 23 回の英会話授業スタート ・第 3 回教職員ロイロノート研修 ・国際交流基金職員によるポップカルチャー講座	・月 3 回実施（5 月～2 月）ロイロノートを使用し、教材を児童に提供 ・カンボジアで人気のあるポップカルチャーについて国際交流基金のデータを紹介してもらい、またカンボジア人に人気のある日本アニメについての紹介を受けた。
6 月	・第 4 回教職員ロイロノート研修 ・第 1 回現地校・インター校交流会（ポチェントン校）	・アンケートを配布しデータ集積
7 月	・第 2 回英語スピーキング、リスニングテスト ・第 1 回オンライン英語交流会（枚方市立小学校）	・1 学期分英語力データの集積 ・ZOOM のブレイクアウトルームを活用し、1 対 3 の少人数グループで、10 分間の英語のみの会話を行った。

9 月	・前期教職員ロイロノート実践交流会 ・第 2 回現地校・インター校交流会（SCIA 校） ・第 2 回オンライン英語交流会（グアム日本人学校） ・第 3 回オンライン英語交流会（枚方市立小学校）	・アンケートを配布しデータ集積
10 月	・第 4 回オンライン英語交流会（枚方市立小学校） ・第 5 回オンライン英語交流会（グアム日本人学校）	
11 月	・第 6 回オンライン英語交流会（枚方市立小学校） ・第 7 回オンライン英語交流会（グアム日本人学校）	
12 月	・後期教職員ロイロノート実践交流会 ・第 3 回英語スピーキング、リスニングテスト ・第 8 回オンライン英語交流会（枚方市立小学校）	・2 学期分英語力データの集積
1 月	・第 3 回現地校・インター校交流会（AISPP 校）	・アンケートを配布しデータ集積
2 月	・第 4 回英語スピーキング、リスニングテスト ・研究のまとめ	・3 学期分英語力データの集積

4. 代表的な実践

(1) 王立プノンペン大学学生による英会話授業

今年度より学習した英語を使う場所として英会話授業を創設した。ここでは、王立プノンペン大学の学生が児童生徒の先生として活躍した。事前に学生には英語担当が作成した教材を配布し、それに沿って授業を展開してもらった。学生一人ひとりが児童の事をよく考え、追加で教材を用意したり、優しくコミュニケーションを取ってくれたりと、英語力向上以外にも国際交流の貴重な機会として、非常に効果的な取り組みとなった。

図 1　王立プノンペン大学学生との英会話授業の様子

(2) ロイロノートを使用した宿題

本校児童の英語力を伸ばすには英語に触れる機会を増やすことだと考えた。そこで英語の時間に毎回ロイロノートを利用した宿題をフィリピン人英語講師に作成してもらい、授業時間以外に英語に触れる時間を設定した。宿題にはリーディング、リスニング、ライティング、スピーキングの 4 技能を交えたものを作成した。リーディングではロイロノートで手本となる音声を配布し、その後自分で録音したものを提出させた。スピーキングではロイロノートの録画機能を活用し、教師にインタビューを行わせ、その様子を録画して提出することにより、児童の発音に

ついても確認を行った。

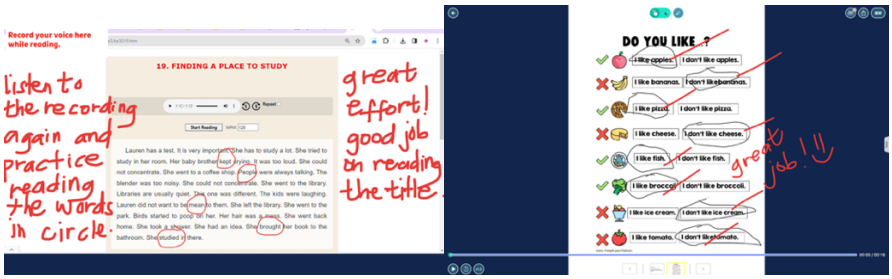


図２　ロイロノートを利用したリーディングとリスニングの宿題

(3) 現地校・インターナショナル校交流

今年度は小学部全体で６月に現地校交流（ポチェントン校)、９月にインター校交流（SCIA 校)、１月に５年生のみインター校交流（AISPP 校）を行った。この交流会では総合的な学習の時間で調べてきた日本のアニメの魅力について英語で紹介し、日本の文化・アニメファン獲得を目指した。この中では「ドラえもん」「クレヨンしんちゃん」「推しのこ」「名探偵コナン」などが取り上げられ、ロイロノートを使いそれぞれの学年が趣向を凝らしながら発表を行った。

図３　現地校交流会の様子とロイロノートで作られたプレゼンテーション

(4) オンライン英語交流

５年生では全校に先駆けて、オンライン英語交流を２校と実施した。一つは枚方市立小学校、もう一つはグアム日本人学校である。この中では、英語のみでコミュニケーションを取ることにこだわった。事前に各校の先生と打ち合わせを行い、話すテーマを決定し、ヒントカードを作成した。時間は 10 分間のみとし、その時間でどれだけ相手の事を理解できるかに挑戦をした。一人ひとりの会話時間を確保するため、ZOOM によるブレイクアウトルームを設定し、個別の空間の中でコミュニケーションを取らせた。

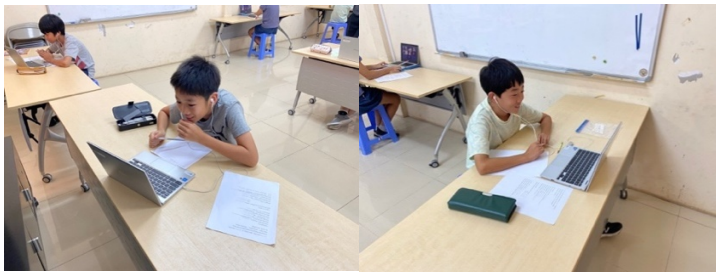


図４　オンライン英語交流の様子

(5) 教職員ロイロノート研修、ロイロノート通信の発行

ロイロノートの宿題、ロイロノートを使ったプレゼンテーションによる交流を成功させていくために大切なことは、児童、教員がロイロノートの操作に慣れ、当たり前のようにロイロノートを使える環境を作ることであると考えた。そこで、前期期間中に 4 回の職員ロイロノート操作研修を設け、また 9 月には前期のロイロノートを使った実践交流会を行った。12 月にもロイロノート実践交流会を設け、各教員のロイロノート操作の技能を高めた。さらにロイロノートを使った授業を活性化させ、そして技能も高めていくため、月に 2 回ロイロノート通信を作成し、各教員の授業風景を取材、それを発信した。この中では、ロイロノートの使える機能についても随時紹介していった。

図 5　教職員ロイロノート実践交流会の様子とロイロノート通信

5. 研究の成果

(1) 児童の英語力の変化（データを 1 年間とり続けられた G1-G5 に限定）

これらの実践を行い、児童の英語力にどのような変化があったのか、4 月からの変化を表に表した（赤丸が学年末の到達点）。会話力に関しては、年に 4 回 ALT との会話力テストを行い、図 6 にある予め決めておいた評価基準に従い、評価を行った。なお、個人が特定されないよう、データは順不同に並べ替えて提示している。A を 4 点、B を 3 点、C を 2 点、D を 1 点とし、個人平均点と学年平均点を換算している。リスニングに関しては年に 4 回英検のリスニング第一部の問題を利用し、測定した。5 級を標準とし、4 級を 1.25 倍、3 級を 1.5 倍、準 2 級を 1.75 倍として得点換算し、個人平均点と学年平均点を示した。12 月以降は各級 70 点以上をクリアしたものは次の級のテストを受験させた。この表では 5-50 と書かれている場合、英検 5 級のテスト結果が 50 点であったことを示している。

A	Student is engaged in continuous conversation and asks questions. (Quite fluent)
B	Student can give answers smoothly.
C	Student can give answers to some questions.
D	It is difficult for student to give an answer.

図 6　英会話力測定のための評価基準

	Apr	Jul	Dec	Feb	個人平均点
1	D	B	B	B	2.5
2	A	-	A	A	4
3	A	A	A	A	4
4	D	C	C	C	1.75
5	D	D	C	C	1.5
6	C	B	B	B	2.75
学年平均点	2.16	2.6	3	3	2.75

G1

	Apr	Jul	Dec	Feb	個人平均点
1	D	-	C	C	1.66
2	A	B	A	A	3.75
3	A	A	A	A	4
4	A	B	B	A	3.5
5	A	A	A	A	4
6	A	-	A	A	4
7	D	D	B	C	1.75
学年平均点	3.14	3	3.42	3.42	3.24

G2

	Apr	Jul	Dec	Feb	個人平均点
1	-	A	A	A	4
2	A	A	A	A	4
3	A	B	A	A	3.75
4	A	A	A	A	4
5	B	C	C	B	2.5
6	-	B	C	B	2.66
7	B	B	B	B	3
学年平均点	3.6	3.28	3.28	3.57	3.42

G3

	Apr	Jul	Dec	Feb	個人平均点
1	A	A	A	A	4
2	C	-	B	B	2.66
3	C	C	C	B	2.25
4	A	B	A	A	3.75
5	D	D	C	C	1.5
6	-	-	A	A	4
7	A	B	B	A	3.5
学年平均点	2.8	2.6	3.14	3.42	3.09

G4

	Apr	Jul	Dec	Feb	個人平均点
1	C	C	C	B	2.25
2	-	A	A	A	4
3	A	B	A	A	3.75
4	B	B	B	B	3
5	A	A	A	-	4
6	A	A	A	A	4
7	D	-	C	B	2
8	B	B	B	B	3
9	B	B	B	B	3
10	A	A	A	A	4
学年平均点	3.11	3.33	3.3	3.44	3.3

G5

図７　４月からの英会話力の変化について

	Apr	Jul	Dec	Feb	個人平均点
1	5-0	5-50	5-60	5-80	63.3
2	5-20	-	5-70	4-70	59.1
3	5-20	5-40	5-50	5-50	40
4	5-60	5-50	5-80	4-70	69.3
5	5-40	5-10	5-50	5-20	30
6	5-40	5-20	5-70	4-50	48.1
学年平均点	30	34	63.3	64.5	51.6

G1

	Apr	Jul	Dec	Feb	個人平均点
1	5-80	5-90	4-100	3-80	103.7
2	5-100	-	4-80	3-90	111.6
3	5-80	5-100	4-70	3-90	100.6
4	5-20	5-40	5-90	4-100	68.7
5	5-40	-	5-0	5-70	36.6
6	5-100	5-90	4-80	3-90	106.2
7	5-40	5-20	5-70	4-10	35.6
学年平均点	65.7	68	81.7	104.6	80.4

G2

	Apr	Jul	Dec	Feb	個人平均点
1	-	5-40	5-80	4-80	73.3
2	-	5-100	4-100	3-100	125
3	5-40	5-40	5-40	5-90	52.5
4	5-100	5-100	4-80	3-80	105
5	5-40	5-30	5-20	5-50	35
6	5-80	5-100	4-100	3-90	110
7	5-80	5-100	4-100	3-100	113.7
学年平均点	68	72.8	87.8	113.5	87.8

G3

	Apr	Jul	Dec	Feb	個人平均点
1	5-100	5-100	4-60	4-80	93.7
2	5-20	-	5-50	5-80	50
3	5-100	5-90	4-90	3-100	113.1
4	5-80	5-90	4-90	3-90	104.3
5	-	-	4-90	3-100	131.2
6	5-80	5-100	4-100	3-100	113.7
7	5-40	5-40	5-30	5-0	27.5
学年平均点	70	84	88.2	109.2	90.5

G4

	Apr	Jul	Dec	Feb	個人平均点
1	-	4-100	3-80	pre2-90	134.1
2	4-60	4-80	3-100	pre2-70	111.8
3	4-100	4-100	3-100	pre2-100	143.7
4	4-100	4-90	3-100	-	129.1
5	4-100	4-100	3-90	pre2-90	135.6
6	4-100	4-100	3-100	pre2-100	143.7
7	4-60	4-80	3-60	3-100	103.7
8	4-0	-	3-80	pre2-20	51.6
9	4-100	4-90	3-60	3-80	111.8
10	4-80	4-70	3-50	3-70	91.8
学年平均点	97	112.5	123	133	115.7

G5

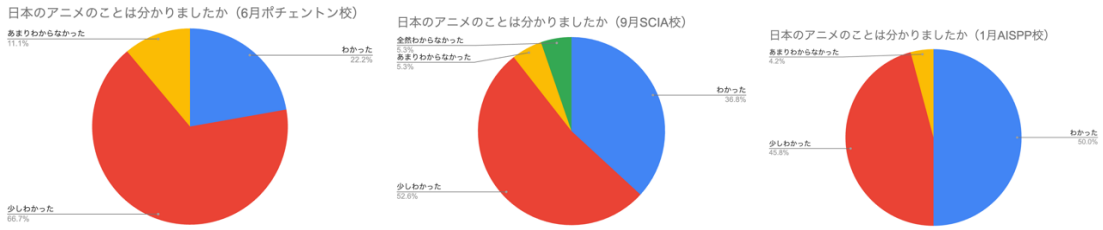
図８　４月からのリスニング力の変化について

図７から児童の英会話力が向上していることがわかる。４月当初にＤやＣの評価だった児童も少しずつ会話力が向上している。これは非常に重要で、英語力の差が激しい日本人学校においては、それぞれの差が縮まってくることにより、さらに発展した英語の内容を扱える可能性が広がってくる。図８からリスニングに関してほとんどの児童に伸びが見られた。しかし、伸びが見られない児童も数人おり、今後の手立ての必要性を示している。G5 に関しては全ての児童が英検 3 級レベルをクリアすることができ、伸びが大きかった。

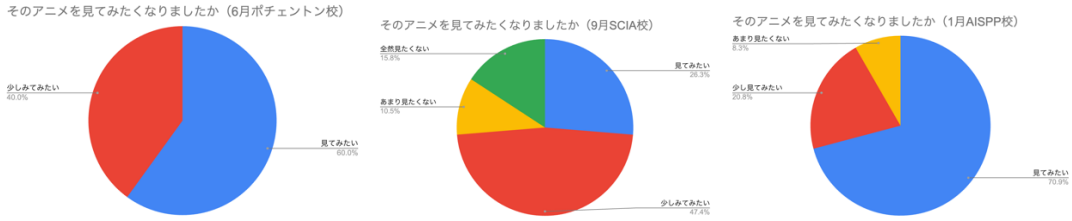
(2) 各交流会でのアンケート結果

アンケートについては年間3回交流を行ったG5の結果に焦点を当てて示していきたいと思う。どの項目に関しても質問に対して4つの選択肢を用意し、答えてもらった。アンケート総数は、6月ポチェントン校10名、9月SCIA校19名、1月AISPP校24名となっている。色別には青、赤、黄、緑の順番になり、青が一番肯定的な回答である。

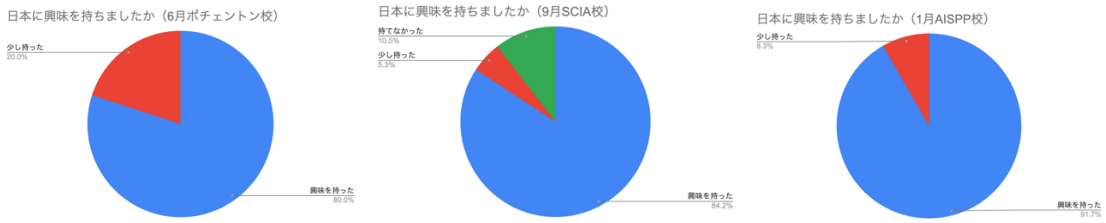
①日本のアニメのことはわかりましたか。



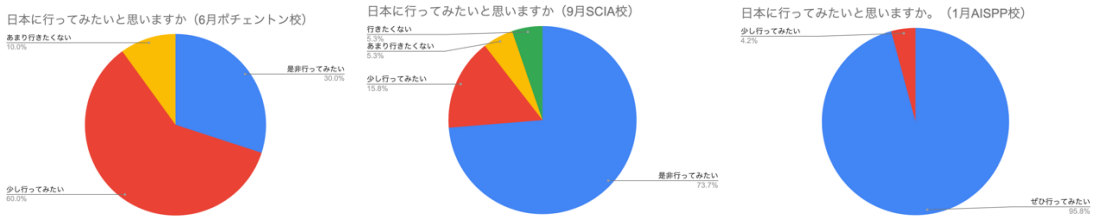
②今度そのアニメを見たくなりましたか。



③日本について興味を持ちましたか。



④日本に行ってみたいと思いますか。



アンケートの結果より、交流を重ねるごとに相手校の結果が良くなっていることがわかる。これはどの学年についても同じことが言え、最初のポチェントン校のデータより、SCIA校との交流のデータのほうが向上している。G5に関しては3回の交流で常に反省、改善を重ねてきた。6月ポチェントン校との交流の際はプレゼンテーションの発表のみであったが、AISPP校との交流の際は名探偵コナンの映像を流したり、コマ回しや習字体験を入れ込んだりするなど、相手が見たい、知りたい内容へと変化させることができていた。

6. 今後の課題・展望

研究の成果からわかるように、児童の英語力は着実に伸びてきている。しかし、基本のところでつまずいてしまっており、成長曲線に乗れていない児童が数名いることもわかった。当初の計画ではロイロノートによる毎日の英語の宿題で、個別最適化された課題を配信し、英語力を向上させていこうと考えた。だが、作成にかかる時間、それを説明する時間を考えると、やはり授業がある日にちに限定されてしまい、「毎日英語に触れる」を実現するには課題が多かった。アウトプット機会については各学年、現地校・インター校交流を 2 回取ることができ、5 年生については交流会以外に、グアム日本人学校、枚方市立小学校とのオンライン英語交流を導入し、英語力の伸びは他学年に比べ、やはり大きかった。

今年度の反省から、来年度は教員の負担を少なく、子ども達が毎日英語に触れる機会を確保する事が重要と考えた。そこで REKIDS 社の「カラオケ English」というソフトを導入することを決定した。「カラオケ English」はアルファベットの基礎から高校レベルまでの英語をカバーでき、リスニング、スピーキングを中心に学べるソフトウエアである。また児童生徒の学習度合いについてチェックできる機能も備え、効果的であると判断した。また、アウトプットの機会増加が英語力向上に大きく寄与していることから、さらなる英語を使う機会の増加を検討した。そこで、校内で話し合いを重ね、CLIL（内容言語統合型学習）をスタートさせることを決定した。CLIL では社会や理科、算数などの学習と英語の学習を融合させる。他校との交流と、CLIL 授業を統合させることで、インプットとアウトプットを増加させ、真に使える英語力の獲得を目指す。

7. おわりに

今回の研究により、子ども達の英語力を育んでいくためには、英語に触れる機会の増加が大きく関わっていることがわかった。また英語力については一朝一夕に伸長するわけではなく、不断の努力が大切であることも示された。プノンペン日本人学校ではパナソニック教育財団の実践研究助成を受けることにより、データを蓄積したり、新たな英語力向上手法を考えたりすることができるなど、児童の英語力向上に向けて、良いスタートを切ることができた。この場を借り、パナソニック教育財団の関係者の皆様に感謝を申し上げたい。2024 年度も様々な施策を行い、データをしっかりと集積、分析することにより、児童の英語力向上を目指す。

8. 参考文献

・渡部良典・池田真・和泉伸一（2011 年）『CLIL（内容言語統合型学習）上智大学外国語教育の新たなる挑戦　第 1 巻　原理と方法』　上智大学出版
・和泉伸一・池田真・渡部良典・(2012 年)『CLIL（内容言語統合型学習）上智大学外国語教育の新たなる挑戦　第 2 巻　実践と応用』　上智大学出版
・池田真・渡部良典・和泉伸一（2016 年）『CLIL（内容言語統合型学習）上智大学外国語教育の新たなる挑戦　第 3 巻　授業と教材』　上智大学出版
・池田真　『教育現場での CLIL 活用のポイント』　増進堂・受験研究社